



▲なめす前の脱毛した牛皮は乾燥してカチカチに固い



▲余った皮を薄くひも状にして独特の縫い方で革を縫う

▼丸太の中心をくり抜く機械はなんと大柄さんの手づくり



くり抜いた丸太

# くらしにそっと息づく和太鼓づくり



太鼓職人

お お え し げ と

大柄 重人さん

日南町の素材にこだわって和太鼓づくりをしてきた大柄太鼓店の4代目。平成17年に和太鼓づくりにおいて最年少の鳥取県伝統工芸士に認定された。「第13回聞き書き甲子園(平成26年度)」に登場。

「森の名手・名人」をご紹介します。  
日本人が古くから育んできた森とともに生きる知恵や技を次世代に伝えようと、今も現役で活躍する

## 鳥

取県日野郡日南町で太鼓店を営む4代目当主の大柄重人さん。伝統的な製法を用いて和太鼓をつ

くる中国地方唯一の太鼓職人で、町の活性化を目的に、可能な限り日南町の材料を活用した太鼓づくりに励んでいます。なかでも胴に使用するケヤキ材は、大柄さんの所有する山から伐採することもあるそうです。「斜面など厳しい環境で育つケヤキは、硬く音の響きが良い上、腐りにくい。そういった強い木を育てるためにも自分でしばしば山に入り、木の様子を意識して見るようにしている。良い太鼓をつくるために、山を大切にすることも太鼓職人の仕事だからね」と大柄さん。

そんな大柄さんですが、若い頃は「太鼓づくりなんて地味な仕事はやりたくない」と、高校を卒業してすぐに家を飛び出したそうです。しかし、100年以上も続く大柄太鼓店の歴史を途絶えさせることはできないと、20歳のときに家業を継ぐ決心をしました。

「太鼓づくりは小さいときから親父の手伝いで見とったから、すぐにできるようになると思ったけど、現実はそのように甘くなかった。使う人の求める音に合わせてつくるには革や胴の厚みの調整が必要で、その作業は経験と勘によって探っていくしかないよ。それに、天然の皮は製品にしてからも風合いの変化で音が変わる。その変化を



▲作業場には 200年以上前の太鼓やつくりかけの太鼓がずらり。太鼓は木を切ってから完成するまでに10年以上もかかるそうだ



▲「お気に入りの場所」と大柄さんの所有する山に案内してくれた



▲太鼓をつくる上で欠かせない牛皮の厚みを整える「皮かんな」

年がけた太鼓は  
自分の子どもみたいに  
大事な存在だね



▲精力的に活動する奥日野源流太鼓。現在大柄さんは練習メニューを考えるなど代表としてグループをまとめている

歴代「名手・名人」の聞き書き結果はコチラ  
▶ <http://www.foxfire-japan.com/>

見極めるのも至難の業。そういった簡単にたどり着けない太鼓づくりの奥深さに、いつの間にかどっぷりと夢中になっていったんだ」

こうして和太鼓のとりことなった大柄さんは、親子参加型の太鼓づくりイベントなどを開催するほか、自身で太鼓を叩く和太鼓団体「奥日野源流太鼓」を結成。太鼓づくりにとどまらず、さまざまな活動を通じて和太鼓の伝承や普及に貢献しています。

「打ち手の魂とか振動を肌で感じられる和太鼓は、祭りや伝統芸能などを通じて、古くから日本人のくらしに寄り添ってきた。今、その伝統を受け継ぐ後継者は減ってくるけど、太鼓に携わる者として俺が技術・技能を後世に伝えていく必要があると思ってる。そのためにも、多くの人に太鼓の魅力を感じてもらえるような場を提供していきたいね」

大柄さんの夢は、太鼓の材料となる木が育つ森や、伝統的な太鼓づくり、太鼓演奏のイベントなどを通して、日南町を太鼓の感じられる町にすることで。「太鼓には人を結ぶ絶大な力があるんよ」と胸を張って話す大柄さんの熱い思いを乗せて、今日も日南町には太鼓の音色が力強く響き渡っています。